

児童養護に携わる援助者の成長についての一考察
—援助者の持つ「強さ」「弱さ」をキーワードにしたアンケート調査から—

下 木 猛 史

A Consideration on the Growth of Aids in Child
Care:From a questionnaire survey using the keywords
“strength” and “weakness”

Takeshi Shimoki

豊岡短期大学 論集

第 16 号 別 冊

令和 2 年 3 月 31 日 発 行

児童養護に携わる援助者の成長についての一考察

—援助者の持つ「強さ」「弱さ」をキーワードにしたアンケート調査から—

A Consideration on the Growth of Aids in Child Care: From a questionnaire survey using the keywords “strength” and “weakness”

下木 猛史

Takeshi Shimoki

はじめに

今日、児童養護施設や児童心理治療施設等の児童養護分野の施設において、支援を必要とする子どもたちの抱える問題は、被虐待児童の入所率の高さに表されるようにますます深刻化してきている。これらの施設で働く援助者は、子どもたちの心身の回復と成長のため、より高度な専門性と粘り強い支援が求められるようになってきている。しかし、援助者は、求められる支援を十分に実践することができない厳しい状況があると思われる。

児童養護施設職員のバーンアウトについての調査研究では、多くの職員がバーンアウト寸前の状態にありながら日々奮闘していることが示されている。そのため、職員の職場定着が望めず、専門性の蓄積や向上ができない状況の中で支援を続けざるを得ないことが数多くあるように思われる。

援助者は、子どもたちの心に寄り添い成長を支援する実践を通し、自らの専門性や人間性の向上、成長が促され、それが子どもたちの支援に還元されていくと考えれば、援助者の成長がなければ、子どもたちの成長も望めない。しかし現実には、援助者として自らの成長を感じながら支援を行えているといえるであろうか。

本研究では、上述の背景を基として、援助者が自らの成長をどのように捉えているのかについて、アンケート調査を通して、その状況の一端を示し、そこから見えてくる援助者の成長と課題を明らかにしていくことを目的としている。

その際、援助者の成長を、「強さ」「弱さ」というキーワードで捉えた。援助者は、子どもの支援を進めていく上において、その支援を効果的に進めていける「強さ」（強み）と、その支援を停滞させ

る「弱さ」(弱み)の両面を有している。援助者は自ら持つ「強さ」「弱さ」を見つめ、受け入れることで、「強さ」を活かし、「弱さ」を克服しながら成長が図られるという仮説を土台に、援助者が持つ「強さ」「弱さ」について調査を行い、児童養護に携わる援助者の成長の課題について考察していく。

方法

1. 対象 A 県の児童養護施設 5 施設に勤務する子どもの支援に直接関わる 103 名を対象に調査を行った。そのうち回答のあった 89 名 (回収率 86%) を調査対象とした。調査の対象職種は、児童指導員・保育士・心理士である。

2. 調査票の内容 小山や飯田の論文及び、施設勤務経験者である筆者の経験知をもとに、援助者の「強さ」「弱さ」についての項目を、「援助者としての資質に関すること」「子どもとの関わりに関すること」「仕事に対する姿勢に関すること」の 3 つのカテゴリーに分け、それぞれのカテゴリーに属する項目を導き出した。調査内容は、援助者としての「強さ」「弱さ」の有無についてと、「強さ」「弱さ」のそれぞれの項目の有無について回答してもらった (表 1)。その他に、援助チームの「強さ」「弱さ」や、離職の意思、バーンアウト自己診断についても回答してもらったが、この分析結果及び考察については今回は行っていない。

3. 調査方法 平成 28 年 2 月 1 日～2 月 28 日にかけて、A 県の各施設に質問紙法による郵送調査を行った。

4. 倫理的配慮 倫理的配慮として、鹿児島国際大学教育研究倫理審査委員会の承諾を得て実施した。調査対象施設に文書で調査目的、内容、方法について説明し承諾を得た。また、調査票は無記名回答として個人名が特定されないようにプライバシーに配慮した。得られたデータは本研究以外には使用しないことを約束した。

5. データの分析 データの分析は、IBM SPSS Statistics Ver.24 を使用した。

表1 援助者の「強さ」「弱さ」についての項目

援助者の持つ「強さ」	援助者の持つ「弱さ」
援助者としての資質に関すること	
子どもに対する深い関心を持っている 子どもに対して緊張など特別なエネルギーを使わず自然体で関わられる 子どもに対して内省性を持ち開かれた態度で接することができる 子どもに対して温かさや寛容性,批判的でない態度で接することができる 子どもに対して優しさと厳しさを併せ持ち対応することができる 子どもに対して熱意と冷静さを併せ持ち対応することができる 喜びや悲しみが折り重なりあう出来事に対して,ユーモアや楽観性を持つことができる 子どもに対して理解力や共感力を持っている	子どもに対する深い関心が持てない 子どもに対し緊張したり不安になったり特別なエネルギーを使ってしまう 子どもに対して固定された価値観でみてしまいがちになる 子どものことにエネルギーを注ぎ込みすぎて周囲がみえなくなってしまうことがある 子どもに対して優しさと厳しさを併せ持つ対応をうまくすることができない
子どもとの関りに関すること	
自制力を持ち,子どもの最善や必要な関心を優先することができる 子どもの理解する力やスピードに合わせて待つことができる 子どもと健全で親密な関係を作ることができる 子どもに対して力を適切に行使することができる 子どもの話をじっくり聞くことができる 子どもに対して違和感なく話すことができる 子どもの興味関心に応じて自分の興味関心をひろげていくことができる 子どものふるまいをある程度理解でき巻き込まれず冷静さや慎重さを持ち対処することができる	子どものふるまいに巻き込まれやすく冷静さを失いがちになる 子どものふるまいに対し自分の考えをはっきり子どもに伝えることを躊躇してしまう 子どもの考えをじっくり聞けず自分の考えを優先しようとするところがある 施設の規則に従おうという意識が強すぎて柔軟性に欠いた対応になってしまう 子どもに受け入れられたいという気持ちが強すぎて対応がぎこちなくなってしまう 緊張や対立場面で子どもに向き合うことができない 子どもに対して何かしてあげなければという想いが強くなる傾向がある 子どものふるまいに対してすぐにカッとしてしまい冷静さを失ってしまう 子どもの目を気にしてしまいがちになる 子どもに対して言葉ではなく態度や表情で表そうとしすぎるところがある
仕事に対する姿勢に関すること	
仕事に対して責任とやりがいを持ち取り組んでいる 子どもの支援を通して自分も成長したいと考えている 自分の仕事について自分の家族の理解と協力が得られる 支援に関する専門的な知識を習得しようと努力し知識を積み重ねている	支援に関する専門的な知識が不十分で自信がなく会議等で発言するのを戸惑う 子どもの支援を考える前に上司や同僚の目が気になってしまう 上司や他の職員からのアドバイスなどを被害的に受け止めてしまう傾向がある 自分の仕事について自分の家族の理解と協力が得られにくい 専門的な知識を習得しようとする意欲がない

結果

1. 回答者の概要 回答者の概要を表2に示した。男性が33人(37.1%)、女性は56人(62.9%)で女性が多かった。年齢の平均は全体が34.0歳、男性33.6歳、女性32.6歳であった。年齢別では、全体では20歳代が42.7%と最も高く、20歳~30歳代の職員の占める割合は全体の74.2%であった。

経験年数 1～2 年の割合が全体の 37.1%と最も高かった。1～2 年及び 3～5 年の経験年数の短い職員の占める割合は全体の 58.4%、経験年数の短い職員が全体の半数以上を占め、それに比して中堅層の占める割合が低かった。

表 2 回答者の性別／職種／経験年数 (n = 89)

	男 性	女 性	全 体
児童指導員	87.9% (29)	41.1% (23)	58.4% (52)
保育士	9.1% (3)	50.0% (28)	34.8% (31)
心理士	3.0% (1)	8.9% (5)	6.7% (6)
1～2年	30.3% (10)	41.1% (23)	37.1% (33)
3～5年	24.2% (8)	19.6% (11)	21.3% (19)
6～10年	9.1% (3)	14.3% (8)	12.4% (11)
11～15年	6.1% (2)	8.9% (5)	7.9% (7)
16～20年	12.1% (4)	7.1% (4)	9.0% (8)
21年～	18.2% (6)	8.9% (5)	12.4% (11)
合 計	37.1% (33)	62.9% (56)	100% (89)

2. 援助者の持つ「強さ」の有無について 援助者として「強さがある」と回答した人は全体では 74.2%で、「特になし」は 24.7%、「無回答」は 1.1%であった。経験年数別にみると、6～10 年が 100%と最も多く、次いで 11～15 年が 85.7%となり、16～20 年が 75.0%、1～2 年が 69.7%、3～5 年が 68.4%、最も少なかったのは 21 年以上の 63.6%であった。「特にない」と回答した人は、21 年以上の 36.4%が最も多く、次いで 3～5 年の 31.6%となり、最も少なかったのは 6～10 年の 0%であった。

3. 項目別にみた援助者の持つ「強さ」について 項目別にみた援助者の持つ「強さ」についての回答結果を図 1 に示した。回答が最も多かった項目は「子どもの支援を通して自分も成長したいと常々考えている」が 49 人(55%)、次いで「仕事に対して責任とやりがいを感じている」が 41 人(46%)、「子どもに対する深い関心を持っている」と「自分の仕事について自分の家族の理解と協力が得られる」が 38 人、「子どもの話をじっくり聞くことができる」が 35 人(43%)であった。回答が少なかった(強さをあまり感じられていない)項目は、「子どもに対して緊張など特別なエネルギーを使わず自然体で関わられる」「子どものふるまいをある程度理解でき、巻き込まれず冷静さや慎重さを持ち対応できる」が 15 人(17%)、「子どもに対して内省性を持ち、開かれた態度で接することができる」が 12 人(13%)「子どもに対して力(影響力)を適切に行使できる」が 11 人(12%)であった。

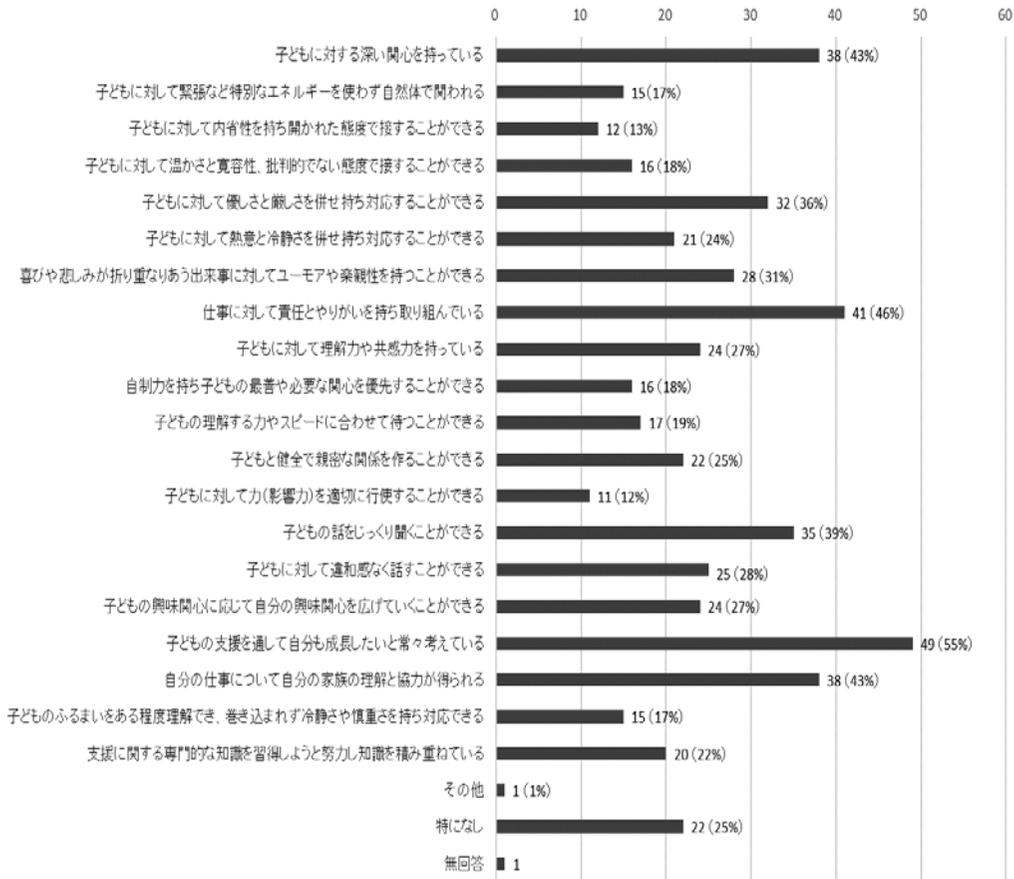


図1 項目別にみた援助者の持つ「強さ」について (n=89, 複数回答) (人)

4. 援助者の持つ「弱さ」の有無について 援助者として「弱さがある」と回答した人は全体では92.1%で、「特になし」は6.7%、無回答は1.1%であった。経験年数別にみると、3～5年・11～15年・16～20年の人が100%で、1～2年が90.9%、6～10年・21年以上が81.8%で、どの経験年数も割合が高い結果となった。「特になし」と回答した人は、6～10年の18.2%が最も高く、次いで1～2年と21年以上が9.1%、その他の経験年数は0%であった。

5. 項目別にみた援助者の持つ「弱さ」について 項目別にみた援助者の持つ「弱さ」についての回答結果を図2に示した。回答が最も多かった項目は、「支援に関する専門的な知識が不十分で会議等で発言するのを戸惑う」が35人(39%)と最も多く、次いで「子どもに対し緊張したり不安になったり特別なエネルギーを使ってしまう」が30人(34%)、「子どものふるまいに巻き込まれやすく冷静さを失いやすくなる」が20人(22%)、「子どもに対して固定された価値観で見てしまいがちになる」「子

どもの支援を考える前に上司や同僚の目が気になってしまう」が共に 18 人(20%)であった。回答が少なかった(弱さをあまり感じていない)項目は、「子どもに受け入れられたいという気持ちが強すぎて対応がきこちなくなってしまう」「緊張や対立場面で子どもに向き合うことができない」「専門的な知識を習得しようとする意識がない」が最も少なく、「子どもに対する深い関心が持てない」「自分の仕事について自分の家族の協力が得られにくい」が2人(2%)であった。「その他」の回答として、「専門職として、他職種との協働という点において力を発揮できていない」「支援に関する専門的知識が不十分な時がある」「自己嫌悪に陥りやすくなる」という回答があった。

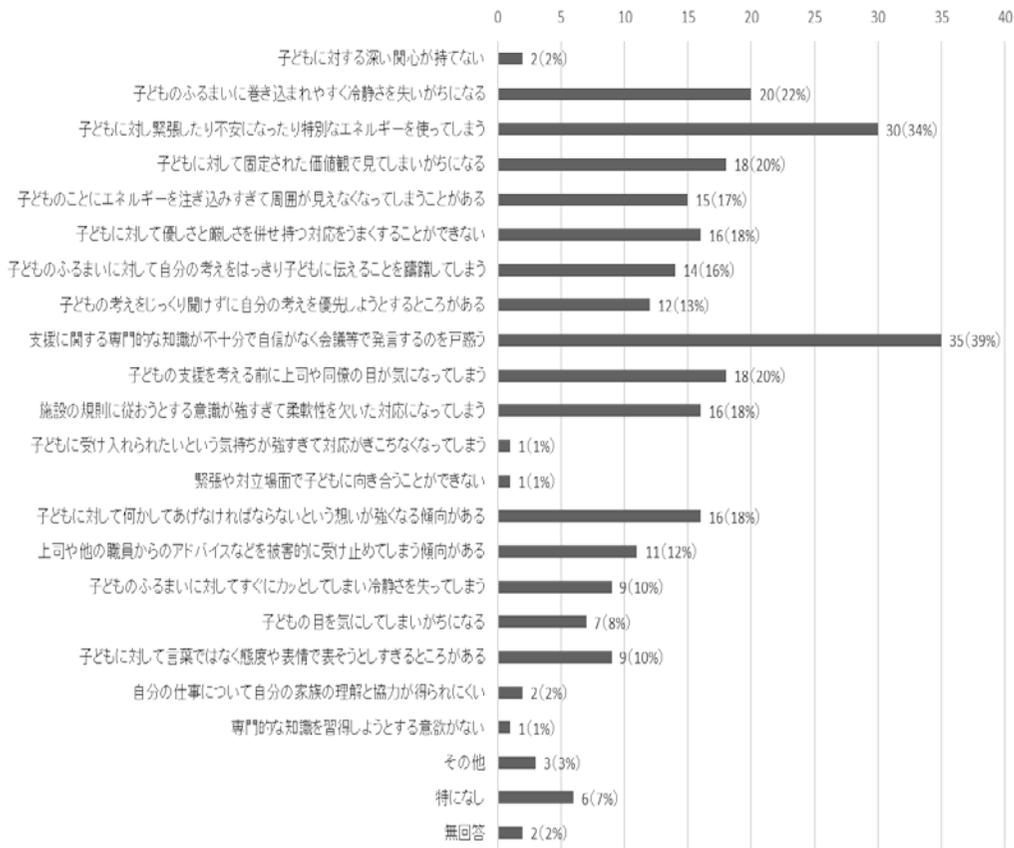


図2 項目別にみた援助者の持つ「弱さ」について (n=89, 複数回答) (人)

結果の分析と考察

1. 回答者の概要についての考察 回答者の概要からみえてくることは、20歳～30歳代の職員が全回答者の74.2%を占め、また、経験年数1～5年の職員の占める割合も全体の58.4%と半数以上を占めていることから、大多数の若手職員が前線で日々の業務を担っていることが考えられる。1～5年の職員の占める割合に比べ6～10年の職員の割合が極端に下がっていることから、5年目以降の職員の職場定着があまりなされていないことが考えられる。1～5年の間で職員が入れ替わるため、中堅層の職員が育たず、施設全体の支援力を積み重ねていけない実態が予想される。

2. 援助者の持つ「強さ」「弱さ」の有無についての考察 援助者の「強さ」を持っていると回答した人は74.2%となり、7割を超える人が援助者として何らかの「強さ」を意識しながら業務にあたっていることがわかった。経験年数別にみると、どの層も3分の2にあたる人が援助者としての「強さ」を持っていると回答しており、援助者として何らかの「強さ」を意識できることが援助者の成長に大切な要素であることが考えられる。経験年数の割合推移をみると、1～2年の69.7%をはじめとして、若干の差異はありながらも、経験年数が上がるにつれ「強さ」を持っていると回答した人の割合は増えていき、6～10年が100%となり、そこから徐々に割合が下がり、21年以上が63.6%となる逆U字型の曲線を示した。援助者としての「強さ」を意識できるほど余裕も自信も持てない1～2年目から、数々の経験を糧にしながらか、3～5年を乗り切り、援助者としての自信がついてきた6～10年、自己覚知が深まり、殊更に「強さ」を意識せずとも謙虚に援助者としての自分を受け入れられる21年以降、という解釈が逆U字型の曲線を説明できるのかもしれない。ただ、ここで着目したいところは、経験年数3～5年から6～10年の層に移る過程で「強さ」を感じる割合が大幅に上がっており、この変化は援助者の成長や職場定着を考えていく上において重要な示唆を与えてくれるものであると考える。

一方、援助者の「弱さ」を持っていると回答した人は92.1%で、回答したほぼ全員に近い人が援助者として何らかの「弱さ」を意識しながら業務にあたっていることがわかった。経験年数別にみてもどの層も80%以上の人々が「弱さ」を持っていると回答し、なかでも3～5年・11～15年・16～20年の層については全員が「弱さ」があると回答しており、援助者の「強さ」に比べ、援助者の「弱さ」の方が援助者に強く感じられていることがわかった。3～5年については、1～2年目の援助者としての自信もなく業務を覚え、それをこなしていくだけで精一杯の時期から、経験を多少積んだことで、あらためて児童養護という業務のやりがいや大変さが現実感を伴って自覚され、援助者としての「弱さ」が強く感じられてくる時期なのではないかと考えられる。6～10年については、他の経験年数層よりも「弱さ」を感じる人の割合が低かった。これは、援助者の持つ「強さ」の有無のところで述べたように、援助者として自信が付きはじめたことにより「強さ」が前面に現れ、「弱さ」が影を潜めている状態なのではないかと考えられる。11～15年や16～20年の層も全員が「弱さ」を持っている

と回答しているが、これは3～5年目の援助者の中で処理しきれない大変さや、そのことによる自信のなさの現れということと様相が異なり、経験を積んだことにより、援助者として「できること・できないこと」の線引きがはっきりと自覚されるようになったことによる「弱さ」の感じられ方が割合として高く現れたのではないかと考える。

3. 援助者の持つ「強さ」の項目についての考察 援助者としての「強さ」をより多く感じているカテゴリーは、「業務に対する姿勢に関すること」で、このカテゴリーの項目では「子どもの支援を通して自分も成長したいと考えている」「仕事に対して責任とやりがいを持ち取り組んでいる」「自分の仕事について自分の家族の理解と協力が得られる」の回答が多かった。経験年数を問わず、子どもと生活を共にしながら喜びも悲しみもすべて援助者自身の成長の糧に変えていきたいという想いや、対人援助職として相手の人生に深く関与していくことの責任感、その仕事を理解してくれる家族の存在が、援助者の持つ「強さ」の基盤にあることがわかった。特に、経験年数3～5年から6～10年の層に移行する段階においては割合が高くなっており、あらためて3～5年の層に対して多方面からの援助者支援が求められるところである。

一方で、3つのカテゴリーの中で最も「強さ」を感じる割合が低かったのは、「子どもとの関りに関すること」のカテゴリーであった。これは、入所児童の抱える問題が複雑・深刻化しており、子どもとの関わりの中で援助者としての「強さ」を見出していくことの困難さが表れているものと思われる。特に気になったのは、このカテゴリーの中の項目である「子どもに対して力（影響力）を適切に行使することができる」について回答した割合が顕著に低い結果となっていることである。この結果は、この項目に対しての援助者への適切なサポートや支援がなければ、子どもに対して力（影響力）を適切でない方向に使ってしまう「施設内虐待」へと結びつく可能性を孕んでいることを示唆しているのではないかと考える。

4. 援助者の持つ「弱さ」の項目についての考察 援助者としての「弱さ」をより多く感じているカテゴリーは、「援助者の資質に関すること」「業務に対する姿勢に関すること」であった。経験年数別にカテゴリー内をみると、「援助者の資質に関すること」では、「弱さ」をより多く感じている経験層は11～15年・1～2年・3～5年であった。反対に6～10年・21年以上の経験層は、他の経験層に比べ少なかった。援助者の資質に関する「弱さ」については、経験層を問わず、回答者のいずれの人も何らかの「弱さ」を感じてはいるが、とりわけその「弱さ」を強く感じているのは、11～15年・1～2年・3～5年の経験層の人たちであることがわかった。このカテゴリーの項目の割合をみると、「子どもに対し緊張したり不安になったり特別なエネルギーを使ってしまう」「子どもに対して固定された価値観で見えてしまいがちになる」が多かった。1～2年・3～5年の経験層は、子どもとの距離感がうまくつかめていないこともあり、援助者としての自分に対する自信のなさから、子どもとの関りも含め業務に対して緊張や不安で消耗していることが多々あるのではないかとということ、11～15年の経験層は、子どもとの関りだけでなく、子どもを取り巻く周辺との調整という役割も立場的にこなし

ていかなければならない年代層であるため、そのことが逆に子どもとの関りをぎこちないものにさせたり、経験に頼りすぎて子どもを固定した価値観で見ているのではないかということが予想される。「子どもとの関りに関すること」では、「弱さ」をより多く感じている経験層は、3～5年であった。3～5年は、子どもとの関りに関する「弱さ」を、他の経験層よりも多く感じており、6～10年になると、その「弱さ」は緩和され、子どもとの関りに関する「強さ」が優位に立つ場合もあることがわかった。このカテゴリーの項目の割合をみると、「子どものふるまいに巻き込まれやすく冷静さを失いがちになる」「施設の規則に従おうとする意識が強すぎて柔軟性を欠いた対応になってしまう」「子どもに対して何かしてあげなければならないという想いが強くなる傾向にある」が多かった。1～2年・3～5年は、子どもの行動に対する見立てが未熟なところがあるためどうしても不安が先に立ってしまいがちである。その不安や自信のなさが上述の「弱さ」につながっているのではないかと考えられる。また、「子どものふるまいに巻き込まれやすく冷静さを失いがちになる」は、援助者の持つ「強さ」の項目である「子どもに対して力（影響力）を適切に行使することができる」の対概念である「弱さ」を感じる回答の割合が高く出ている。これは「施設内虐待」へと結びつく可能性を孕んでいる要素があるため、援助者への適切なサポートや支援が強く望まれるところである。

「業務に対する姿勢に関すること」では、「弱さ」をより多く感じている経験層は、3～5年が他の経験層に比べ顕著に高い割合を示していた。特に1～2年・3～5年が他の経験層に比べ高い割合を示していた。また、6～10年になると、「弱さ」を感じる人の割合は0%となり、「弱さ」が減少していた。1～2年及び3～5年は、業務に対する姿勢に関することの「弱さ」を、他の経験層よりも多く感じており、6～10年になるとその「弱さ」は緩和されることがわかった。このカテゴリーの項目の割合をみると、「支援に関する専門的な知識が不十分で自信がなく会議等で発言するのを戸惑う」「子どもの支援を考える前に上司や同僚の目が気になってしまう」「上司や他の職員からのアドバイスなどを被害的に受け止めてしまう傾向がある」が多かった。上述の3つの援助者の持つ「弱さ」については、特に1～2年・3～5年の経験層が、持ちやすいことがわかった。6～10年になると、その「弱さ」は緩和されているため、専門的な知識の積み重ねの他に、子どもの情報を発信しやすい施設の雰囲気や、子どもの問題行動が援助者個人の指導上の問題として扱われないことが「弱さ」の緩和・克服に関連する要素として考えられた。

まとめ

アンケート結果の考察を通し、援助者の成長についての課題を3点挙げた。いずれの課題も援助者自身の取り組みだけではなく、援助者同士の理解や協力、施設全体の理解や協力が必要な課題でもある。

①援助者の持つ「強さ」の基盤を支えていくこと

援助者として成長していきたいという「強さ」に実感をもてるようになるには、日常の実践についての施設長や上司・同僚からの肯定的なフィードバックを行い、「強さ」の基盤を支えていく取り組みが必要である。

②子どもとの関わりの中で持つ「弱さ」についての理解

子どもとの関わりの中で抱いてしまう「弱さ」は、子どもの抱える問題の深刻さから生じる援助者が本質的に有してしまう「弱さ」であるという認識や理解を深めることや、子どものことで援助者が孤立しないような施設全体の対応が必要である。

③経験年数5年未満の職員が職場定着できるための支援

経験年数6～10年は、3～5年と比較すると「強さ」の割合の増加や、「弱さ」の割合の減少が顕著にみられた。援助者としての成長及び職場定着を含めた施設全体の専門性の向上には、特に、新任を含めた5年目までの職員への細やかな支援体制が必要である。

参考文献

- 飯田昭人. (2013). 対人援助職の資質に関する一試論 (第2報) 内面的資質および外面的資質についての考察, *人間福祉研究*, **16**, 83-88
- 黒田邦夫. (2010). なぜ、職員は辞めるのか, *子どもと福祉*, **3**, 86-90
- 小山 顕. (2011). 対人援助専門職へと導く要因, *聖和論集*, **39**, 15-21
- 西田 篤. (2013). 多職種協働のチームアプローチで支えあう: ある「情緒障害児短期治療施設」での実践から, *世界の児童と母性*, **74**, 54-58
- 尾崎 新. (1999). 「ゆらぐ」ことのできるカーゆらぎと社会福祉実践一, 誠心書房